

シェルター(一時収容施設)のインコ・オウム 自信と信頼のための基礎づくり

S.G. Friedman, Ph.D., Utah State University

Avian Welfare Coalition シェルターのためのマニュアル 2004年2月

(翻訳:石綿美香)

残念なことにシェルターのインコ・オウムの数が増加しているため、そこで働くスタッフは独特な困難に直面しています。この難しさの要因は自然界のインコ・オウムの生態があまり知られていないことにもよります。犬や猫での豊富な経験に基づいてインコ・オウムへの期待値を設定してしまうため、しばしばかかわり方が、押しつけがましかったり強制的だったりして、人々が周りにいてもインコ・オウムが落ち着いて快適に過ごすための手助けに失敗してしまうのです。

インコ・オウムは新しい人、場所、物などにひどく用心深い傾向があるのに、世話をする人があまりに短時間でのかかわりを期待してしまうことがしばしばです。自分のいる環境を制御しようとインコ・オウムは飛びかかり、噛みつき、叫び声をあげるなど問題となる行動を見せるようになることがよくあります。こういった問題となる行動はしだいに解決しますが、シェルターでの滞在時間が短いケースが多いことから、現実的にはスタッフとインコ・オウム双方にとっての行動の目標を優先し、どのように接するべきかについての基礎知識を学ぶことが必要です。

要するにシェルターのスタッフには鳥を施設で世話する間できる限り最大限にインコ・オウムのストレスを軽減する努力をすることをお勧めしたいのです。このアプローチが自信と信頼の基礎となり、これが後に永遠の居所となる家族のもとで継承され、さらに深められてほしいと願っています。

非常に賢い：これは何を意味するか？

人生で確実に起きるのは変化であると言われており、インコ・オウムにもまったく同じことが言えます。すべての動物は生活の中で絶え間なく変化する環境に対応する生物学的メカニズムにより学習する能力があります。インコ・オウムが非常に賢いと言うのは、たいへん柔軟な学習者であるという意味です。つまり経験により即座に行動を変えるのです。インコ・オウムは人のかかわりのひとつひとつから毎回何かを学んでいると思って間違いありません。これは良い知らせです、なぜなら、あなたがインコ・オウムとかかわっている時はかなり経験をコントロールできるからです。ある程度の行動分析のスキルを持っていれば、個々のインコ・オウムの経験という名の銀行口座に人とのポジティブなかかわりの経験を足していってあげられるのです。

パワーと信頼：行動の健康のための必須要素

自信のある動物は自身の環境に影響を与えることができます。避ける機会を与えられることなく嫌な出来事に繰り返しさらされるといろいろ試すことを諦めてしまうという研究結果があります。のちに簡単に逃げられる道筋を作ったとしても、そこから抜け出そうとせず、ただその嫌な環境の中にどうすることもできないままいつづけてしまうのです。自分で決めた事の結末に影響を与えるよう行動する力というのは行動の健康には重要な事のようなのです。シェルターにいるインコ・オウムには、例えばどこに行くかまたはどこにいるかなど可能な限り選択肢を与えるようにすることが、彼らに自信を持たせる大切なステップとなります。制圧より権限をあたえましょう。

信頼は、人との過去にあったポジティブな経験によりつくられた行動の歴史の結果です。ポジティブな歴史を作るということは良い行動が容易に出やすく常にインコ・オウムにとって望ましい結果になるよう環境設定をすることです。なにかインコ・オウムにしてほしい時は必ずかれらにとって得になることができるようにします。力づくではなく合意です。

するどい読者の方は自信と信頼は、古いスタイルの支配的なしつけ方と正反対だと思われるでしょう。この古い方法とは世話をする人が「アルファパロット(インコ・オウムのリーダー)にならなければならない」「だれがボスを知らしめる」「上位にいななければならない」などというものです。そうではなく、インコ・オウムに選択肢を与え、正しい選択をしたことを強化することによって信頼を築く経験をさせましょう。「しななければならない」という対立から、人間の要求に応じる事がなぜ鳥にとって利益になるのかという理由を明確にし「したい」という機会づくりにかえていきます。

行動を理解する

多くのインコ・オウムがペットという状況から飼育放棄されたとはいえ、見知らぬシェルターの環境やスタッフになれるまで厳しい時間を過ごすと考えるのが妥当です。それぞれの人と暮らした歴史にかかわらず、良いものでも悪いものでも、人間が意識しておくべきベストなイメージとはインコ・オウムは野生動物の一種だということです。これにより時間をかけた寛容なかわり方ができる事を望みます。すべてのかわりのペースは常にインコ・オウムに決めさせましょう。

飼育下にあるインコ・オウムがするであろう「わるさ」(人から見て)の種類は、実際はとても少ないのですが、それらが現われると人間と暮らすのが非常に難しくなります。くちばしで噛みたい自然の欲求とそれをとる構わずする事に加え、これらの行動はざっくりと2つの項目にわけることができます。1)人を遠ざけるための行動 例えば噛みつきやケージから出てくることを拒む 2)人間を近くに来させるための行動 例えば継続的な叫びやマジックテープのように人にぴったりくっついて離れない。意味もなく気ままにしている行動は何ひとつないと理解することが重要です。インコ・オウムは噛みつくこと、叫ぶこと、そして人からの要求を拒絶することを学習します。なぜならそれをする事で逃げられるか彼からにとって嫌なものを消し去るか、なんらかの価値あることがおこるための機能を果たしているからです。

さらに行動は全く何もない中では起きません。きっかけとなるキューと状態が、行動(を引き起こす)が起きるための状況を作りだし、その結末(結果)により、将来くりかえすべきか、修正すべきか、または抑えるべきかのフィードバックとなるのです。これらは学習と行動の必須要素です。行動の ABC といいます。Antecedents(先行事象)－Behavior(行動)－Consequences(結果事象)。先行事象と結果事象を明確にすることで、3つの重要な項目があげられます。これにより以下がより良くできるようになります。

- 1) 個々のインコ・オウムの行動について特定の行動の機能についての理解。
- 2) 将来の行動を予測。
- 3) 行動を変えるために環境を変える方法の決定。

フードボウル(エサ入れ)を替える際の、あるインコ・オウムと人間のかかわりについての先行事象、行動、結果の関係性の例をあげてみます。

A: お世話をする人がケージの扉をあけて中にあるフードボウルを取り出す

B: インコ・オウムが手を噛む

C: お世話をする人がフードボウルを置いてケージから手を引いた

プレディクション(予測): お世話する人をケージから追い払おうと さらに噛むようになる

支配的な解決方法の問題点は「噛みつき」を無視することです。この手荒い方法は多くのインコ・オウムに自分の環境は制御できないと教え(人とコミュニケーションはとれない)だけでなく、人は信頼されず、人を遠ざけるためにより強く荒々しい噛みつきが必要になってくるのです。インコ・オウムが不安な時に力と強制を用いるとたいていは LOSE-LOSE の結果となります。

無視や力で制御するかわりに、行動を変えるため、行動の前にある先行事象を変えたり、行動を強化する結果を変えたりします。例えば先行事象を変えるとすると、ケージのレイアウトをフードボウルや水入れへ人が外からアクセスできるようにすることで、人の手がケージの中に入ってくる事の不必要なストレスを鳥に与えるのを避ける事ができるようになります。結果でできる事は、最初に替えるフードボウルに特別なトリーツ(トウモロコシ穀粒やアーモンドなど)を入れる事で、食事の時間がこの時間にしか手に入らない宝物の時間と関連付けられるようになります。

鳥がひとつのボウルで楽しんでいる間に、人は他のボウルを替える事ができます。インコ・オウムにストレスいっばいの行動や望ましくない行動をさせる状況を作ることは避けましょう。毎回は望ましい行動を強化する機会にしていきます。

より良い行動をつくる：基礎

- すべてのインコ・オウムは行動の背景には理由があります。
- その理由を見つけるためには、結果事象と呼ばれるその行動の直後に起こった事をみます。
- インコ・オウムが価値ある結果を得て行動が維持され増えていくのなら、それは強化子と呼ばれます。
- 難しいのはすべてのインコ・オウムには個性-1つの事例-であって、どの結果がポジティブな強化子になるかはそれぞれで異なります。
- あるインコ・オウムの強化子が何かを見極めるには、注意深くその個体の好きな遊び、人、食べるものの好みなどを観察してください。
- 多くの問題行動は不注意から強化された結果によるものです。あなたが強化したものを鳥は身につけます。したがって良いタイミングをとらえて褒める、トリーツ、好きな遊びなどで、できるだけ回数多く強化してください。
- 行動は先行事象、キューそして状態により引き起こされます。
- よく考えられて設定された先行事象は、協力的な行動のための環境設定となり、力や強制の必要を減らします。

強制を合意に置き換える：教え方のコツ

ステップアップ：

1. 鳥にステップアップを教えるため、最終的な行動が出るまでごほうびを渡さずにいるのではなく、少しでも人の手に近づいてくる毎にあげてください。
2. インコ・オウムは通常に下におりるより、上にいくことを好みます。成功しやすい手の位置にしましょう。
3. 人の手に乗りたい鳥は、それを予期して片足をあげることで人にサインを送ります。
4. 多くの鳥にとって、ステップアップしたことへのもっとも価値の高い強化子は、再び降りることです。可能ならこれを一日に数回繰り返してください。

落ち着いて止まり木にいる：

- 1: 人がケージに近づいた時、鳥に落ち着いていることを教えるには、鳥が“騒ぎ立てない”でいられるくらいの程度をみて前進します。それまでのすべてのステップで鳥が落ち着いているのなら1歩前に近寄ります。
- 2: 多くの鳥にとって、人が近づく事で静かにしていたことへのもっとも価値のある強化子は、人がケージから数歩後退する事です。怖がり攻撃的な行動をしたら、前にも後ろにも進まず、ただその場所でじっとしててください。鳥が落ち着いたら、後退します。そのあとまた一歩近づく事を試みてください。
- 3: 後退と褒め言葉をセットにし、褒め言葉を強化子として関連づけていきます。
- 4: 大好きなトリーツ(この時にしか手に入らない)を鳥のケージを通り過ぎるたびに落としてあげてください。これによりあなた自身を強化子として関連づけます。

注：原文での"it" という表現は文脈の中で出てくる動物の性別が不明の場合に用いられる。生物学や獣医学の出版物では慣例的な用法。